

——〔1983.04、『室伏鴻集成』pp. 395-396〕

一方我々は人間としてダンスに「なる」のです。我々はダンスをダンスすると同時に、逆に、ダンスが我々を踊るのです。それで我々の（その？）ダンスは無軌道で、無鉄砲で、エキセントリックで、恐怖的で、ゾツとし、暴力的で、誘惑的なのです。なぜなら誘惑は、舞踏と同じく、おわり（目標）なき、遊びにみちた不可能です。舞踏は、誘惑と同じく、最も遠くのもの、最もへだたったものに死の欲動をかけてなろうとする欲望（vouloir）なのです。

——〔1978.02.02 のノートより〕

私のからだの中に 神的現実を孕ませたいからだ。

人間は神化を生きるほか救いはないからだ。

——〔1983.04、『室伏鴻集成』p. 389〕

その次元で生と死は可逆的になる。もっと正しくいうと、陽気な死を生き、悲惨な生を死ぬのです。しかし、目がくらくらするような速度の中で、自己を失ってはならない。我々が住んでいるのは、「真の」道化とスケープゴートによって「真の」祝祭を行えるほど、政治経済が単純な原始社会、古代専制社会ではなく、（ポスト）資本主義社会なのです。祝祭はより人工的に、虚構的にならざるをえません（原始社会とその祝祭が「自然」だといっているのではない……人が作るものは、あるいみで常に「人工的」なのだ）。

——〔2003.07.11 のノートより〕

? キャバレーの有効性? [……] 超キャバレー的手法が!! 今日作品にはあった  
悲しくて 怖くて 美しいところまで/真実を追い込めるのは 真実しかないのだ。

——〔1996.02.08 のノートより〕

8をやる。手首\腕から 肘\肩の8が 腰 足裏まで連動させる

息の8とともに 腰・膝の波を 連動させる。

このあたり かなりの難度!! 誰も正確に出来てはいないが つづける。

◆ 設定スル: 8の即興スローから 凍結へ…

ICE 寒い 硬化と震え（ニューヨークは-50°Cという）ほとんど氷人間のステップ

が 氷上を滑り クリスタルへ至る

が 関節がカタマリ 息までごえ つらら状

[……]

で 危険な無音の世界 関節が痛み

とともに 軋んで 響くのみだ。

皆 動きすぎ 関節と息とノドまで連動させることが出来ない———難度G

——〔2004.09 のノートより〕

8 を覚える為の オリエンタル

硬直 を知るための 痛み 倒れ込み

不均衡 を覚える為の

ねじれ・よじり は どこから来るのか

身をよじらせる のは なんで

痛みですか

恥辱ですか

内攻 内気ですか

内—外の〈あいだ〉にある

内と外 の〈間〉にある事が すべてです

——〔2001.06.10 のノートより〕

フタを開かれ さあ 出る 立って家へ帰るんだ！と papa と mama に突っつかれて

こども どう動きはじめるか？

と 問う

息の回復 と ヘナト？

〈しかし 鼻の穴も 毛穴さえ 塞がっているのだよ〉

と 答える

Freezing は 全身に及び その入り口／出口を塞いでいるのだ

それを破ルには 痛みがともない

微妙な デリケートな 医者の手当の速度で

破壊し 繕わねばならない

・＝これが コレグラフィーの極意であるだろう

そう解説して即興してみる

(そして次につづけて)

胎児は その幼児は 立ち上がるのだ

すべての 関節に 手当を施しながら

破壊しながら 生成スルのだ

その 速度は 〈外の 速度〉でなければならない

—— [1987.02.27 のノートより]

〈Ma〉については ゲイリーも同じことを言っていたが  
瞬間を焼きつける 又 ひきのばす 変形する という 肉体的・物質的な作業が 東洋の場  
合 身体に即している という点。西洋的方法意識の中で排除された MA は 運動性の中で  
隙間にどれだけの 身体的観察を及ぼすことが出来るかにかかっている。

ひとつのムーブメントの 入つ<sup>マ</sup>速度 という考え方のあやまり

ひとつのムーブメントの中に 無限の 間と重なり合い 結びつきがあること

その間取りの いくつもの ワン があること。

—— [2001.06.10 のノートより]

感覚を超えた速度で

集中は 為されなければならない

ここが重要なのだ

なんて感情に依拠した〈表現〉のハンランする事か

感情よりも 早いものとは何か？

(不定形の未分化な感情の complex 複合の中で

より とびこえて走るものがある筈だ。未分のままに)

それが踊りを達成する意志である。

すなわち

踊りの欲望だ。踊りの根底を支えている欲動だ。

一心不乱に 我を 失う という

我の 外へ 出る 欲望の速度

〈時間の外に 別の もうひとつの時間を産み出す〉こと

・時間の外に 別の もうひとつの時間を産み出す 欲動

それを 死への欲動 というのか

鉤物への意志 というのか

速度を超絶する 絶対への意志 といおうか？

フーコー「外の思考」*Dits et écrits, Quarto*,  
I, p. 562. 「セイレーンの澄んだ声に耳を  
傾けること、振り向いたときにはすでに  
遠ざかっている顔のほうに振り向くこ  
と、それは掟を破り死に直面するだけ  
でも、うわべの世界とその愉しみを打ち捨  
てることだけでもなく、自己のうちに突  
如として砂漠が広がるのを感じるこ  
たなのであって、その砂漠の向こうの端  
(だがこの尺度なき距離は一本の線と  
同じくらい極細くもある)には、指定し  
うる主体なき言語活動が、神なき掟が、  
人物なき代名詞が、表情も眼もなき顔  
が、同であるところの他が、きらめいて  
いるのだ。魅惑の原理が秘かに棲みつ  
くのはまさにここ、この別離と繫留のなか  
だろうか」。

p. 551. 「ブランショのするようにおのれ  
自身の言説を否定することは、言説をた  
えずおのれ自身の外へと移動させるこ  
とであり、言説が語ったばかりの事柄を  
当の言説からたえず剥奪するのにくわ  
えて、言説を発する能力を剥奪するこ  
ともある。[……] 反省ではなく忘却」

p. 552. 「虚構的なものがひそむのは、決  
して事物のなかでも人間のなかでもな  
く、それらのあいだにあるもの、その不  
可能な本当らしさのなかなのだ——す  
なわち、出会い、最も遠いものの近さ、  
私たちのいる場所における絶対的な隠  
し事。それゆえフィクションとは、見え  
ないものを見させることではなく、見え  
るものの不可視性がどれほど不可視で  
あるかを見させることなのだ。」

——〔2001.06.10 のノートより〕

コミュニティを形成してゆく 生産的な（或いは 消費的などといっても 今や同じか）  
時間の 外に もうひとつの時間を 産み出そうとする欲動とは  
コミュニティから外れる衝動であろうか

絶対的な孤独を

まるごと そのまま救出しようとする  
孤独を 孤独のまま コミュニティの 公共の  
時間に溶融させえない まま に  
屹立させようとする  
（冷い 熱い意志に支えられた 欲動）

——〔1983.04、『室伏鴻集成』p. 393〕

肉体のラジカルな直接性は、伝統的であれ、前衛的であれ、あらゆる手段を駆使して、**表層にあ**  
**る何百万もの毛穴を活性化することです。**究極的には、**舞踏ダンサーの皮膚はあぶくをたてるの**  
です。豊饒の海に**時を忘れて歴史以前の時代からぶかぶか浮いている小さな漂流物**のように。流  
れのままに。

——〔1996.02.07 のノートより〕

流動的なものが、固形化される時

**皮フ シミという一枚の皮は**

ウラもオモテも無い ∞ ひとつづきの表面のまま定着される

圧延される プレスされる。

そうして圧延された一枚の鑄形状のものが獲れる として

その 皮フとは どこで終結 切断 されているのか。

遊泳してきたシミのようなカタチは

どこからどこへ、どことどこで

外部と内部を 流通させていたのか。

〔……〕 **薄い 極限まで薄くなった 距離。**〔……〕

**Potential な動物と鉱物の遭遇 シミからシワへ シワからその硬直・石化へ**

そしてその崩壊と帰化へ。どこへ帰化できるのであろうか。空中という 墓場だ。

あるいは砂漠へ 跳躍的に回帰するであろう。

——〔2004.09 のノートより〕

足の裏の喜びが

手の指の折り曲げの ひとつから